

—夢を持ち続けて、夢を叶える—

童話を作りたかった

『私とネコたちの物語』

武知 明子さん

取材・レポート 『めづるくらし』研究会編集部



ふり返ると……私の人生のパートナーはネコです。

でも、今ではみんな天国に行っちゃいました。天国で私を待っていることでしょう。おみやげはかつお節？ にぼし？ エビ！ マタビ！ だよな。

ニャンでもみんな持ってゆくよ。パーティしようね！ 待っていてね。

——『呪文を忘れたネコ』あとがきより——

「私、中学の頃から小さいお話を書いては親友に見せていたの。お話ができると読みたいから送って、と言われて。送ったお話は面白いからって、返ってこなかったけれど……」と遠い日の思い出を懐かしそうに話す武知さん。少女時代は作家になることが夢でした。

昭和15年、東京の芝、増上寺のおひざ元で生を受けた自称「信州育ちの江戸っ子」です。お母様と人力車に揺られて新橋演舞場までお芝居を観に行った記憶も。大事な一人娘でした。東京大空襲の1年前に、浜松町一帯が防災のため強制疎開となり、信州へ。東京の家は壊され、終戦後もそのまま信州に定住、佐久小諸（長野県）で育ちました。

『どこかに都会っ子の匂いが残っていたのでしょうね。男の子たちからは白粉臭いって、それは苛められました。』

そのおかげで!? 今の負けん気の強い自分があるとも。『負けたくない!』を何よりの原動力として、〈人生〉を切り開いてきました。

「〈人生〉に欠かせないもの？ それはネコ！ 何といってもネコ！ ですね。今は、ペット禁止のマンションですから。娘や友人がせつせとネコグッズを買ってきてくれて、この通り（笑）。」

10年前、夫の闘病生活を機に、医師の娘がいる川崎市を「終の棲家」に選びました。リビング脇の和室には、やさしい笑顔の遺影が置かれています。



お盆休みにシンガポールへ。車イスでの海外旅行には、飛行時間が短かく、足元の冷えない温暖な気候の国が嬉しい。



15歳から奏でているお琴。現在お弟子さんは10人。新幹線で佐久の家に戻り、指導を続けている。「音楽とは音を楽しむもの。音に苦しむなら音楽にならない。」とお稽古も楽しみながら。

武知 明子 たけち あきこ

「すみ ゆかこ」のペンネームで創作中。1940年2月29日生まれ（79歳）のため、誕生日はオリンピックと同じ4年に1回で現在19歳!? 1965年に結婚、夫の会社経営の片腕として現場で働きながら、娘、息子を育てる。夫亡き後も仕事を継続。お琴は師範級。今も「佐久三曲協会」で後進の指導を続ける。神奈川県川崎市在住。



(上) 鉛筆はBを愛用。書道も師範級の武知さん。原稿は流れるような美しい文字で。
(下) カンプを前に、次回作の打ち合わせ中。「桜の木の下に眠ってる愛猫マイの物語を。マイを通じて、隣人の心の豊かさや切なさにもふれることができました。供養にもなる筆を持つのですが、数々の思い出が去来して涙ばかり……なかなか進みません。」

「ハンデ」なんてない。 病気を重ねたから書けた『私のこころの物語』

夫を送るまでの介護生活は3年続き、以前手術した「脊柱管狭窄症」が悪化、武知さんは2度目の手術をしました。

「私はどうも難病に縁があつて。40代で脊髄に風邪の菌が入り「ギラン・バレー症候群」を発症したことも。東京の大田病院に半年入院して、一命はとりとめました。私の脊髄にはボルトやプレートがいつぱい入っているの。」

「膝関節症」の治療中に膝に菌が入り化膿して緊急手術、生死をさまよったことも。その後も大腿骨骨折で入院。

そんな体験が『私のこころの物語』を書くことに繋がります。世間や日常と隔離されている入院生活は、お話を創作するには絶好の環境でした。

——私もこの原稿を病院のサイドテーブルで書きました。決して負けません。



時計、写真、ぬいぐるみ、たくさんのネコグッズに囲まれた住まい。「あふれる程あっても、生きているネコの魅力にはかきません。」

いまも車いすですけど、春の光を待っています。川崎から私の思いを、エールを送ります。 すみ ゆかこ——

こんな思いを込めた「あとがき」が、病と闘う子どもたちを励まします。

度重なる入院生活で衰えた足の筋肉を鍛えるため、週に2回のリハビリで体を動かすことを心がけ、マッサージも欠かしません。シルバーカー（歩行を補助する手押し車）で外出ができるところまで回復したら、今度は坐骨神経痛の痛みで、夜も寝られない日々。

人生の後半に車イス生活を余儀なくされても、家族や友人のサポートを得て、海外旅行にも挑戦しました。

「すみません。ありがとう。」涼やかな声で今日も颯爽と街を歩きます。



気に入ったネコの写真や絵がどうしても捨てられず、壁がギャラリィに。



在宅ケアサービス、在宅介護の先進国でもあるフィンランドの首都・ヘルシンキにて。移動は全て、トロリーバスや鉄道の公共交通機関を利用。



小森 由美子：写真家

東京工芸大学(旧写真大学)卒業。〈時事画報社〉専属カメラマンとして勤続の後、フリーランスとして活動。マタニティ&ベビー・フォト・スタジオ〈Curuton クルトン〉代表。2010年「写ガール展」(日本芸術出版社)入賞など。2013年から、日本一人口の少ない町・山梨県南巨摩郡早川町に山村留学中。2015年10月、築200年超と歴史ある入母屋式かぶと造りの家屋を、古民家カフェとしてリニューアルオープンした〈鍵屋〉ゼネラル・マネージャーも務める。

▼鍵屋／〒409-2701 山梨県南巨摩郡早川町奈良田 1064-43 TEL: 0556-20-5556

HP: <https://cafe-kagiya.com/>